

自分の伴のような巡査部長に敬礼し指示命令を受けなければならぬ。銃後にあつて召集を受けずに残つた人達はすべて良い地位についているが、私は平巡査で新任巡査よりはるかにむずかしい心身共に疲れる仕事をやらなければならぬ。生活環境も悪く、ずいぶんと苦勞した。

しかしシベリアのことを思えばと、ただ黙々と聖職に励んだ。

昭和五十年三月三十一日付をもって軍隊と抑留期間を通算し三十三年三か月、任警部補で円満退職し聖職を全うすることが出来た。

伴が司法試験に挑戦するので更に十年働いた。平成元年秋の生存者叙勲に天皇陛下から勲章をいただいた。神仏は見はなさなかつた。

【執筆者の紹介】

現住所 新潟県新潟市上木戸七二七
本籍地 新潟県新潟市上木戸七二七
生年月日 大正七年一月二十四日

入隊 昭和十八年十月二十日 満州東安

一三八七部隊

終戦時の居住地 満州四平街

入ソ日 昭和二十年十月三十一日

抑留地 イルクーツク

作業 建築

引揚 昭和二十四年十二月四日

引揚船 栄豊丸

上陸地 舞鶴

(新潟県 吉田 忍)

青春の思い出

静岡県 黒田仁朗

昭和十四年二月歎呼の聲に送られて、郷土原田村を出発し、大阪の難波別院に集合した。

今日から帝国軍人であり、男子の本懐これに過ぎるものはなく、これで私も日本人として一人前であり、

名譽の上もないと、当時とすれば最高の気持ちであつた。

入念な身体検査を受けて、新しい軍服が支給された。原隊から初年兵受領の幹部が来ており、それぞれ細かい注意事項があり、大阪港に待っていた貨物船の改造輸送船に乗り込んだ。初年兵の大部分は静岡県、愛知県の出身者であつた。

それぞれ甲板に出て、見送りに来た肉親と別れを告げた。だんだん港が遠ざかり、お互いに振り交わしている手も小さくなるにつれて、何とも言いようのない寂しさが込み上げてきた。自然に眼の中に涙がたまっていた。

もう見送りの人の振る手も港もかすんで見えない。瞬間的に孤独感に襲われた。じつと眼を閉じて考えた。俺は何のために兵隊になつたんだ。目的ははっきりしているではないか。

眼を開けて周囲を見渡した。同じような若者が大勢いる。心配することはない。途端に元気が出た。船が港を出るとき心に残っているのは、メガホンを持って、

棧橋を行ったり来たりして「兵隊サーン、兵隊サーン」と叫び続けて見送ってくれたお婆さんがいたことである。誰に言うともなく「兵隊婆さん」として今もって強く印象づけられている。

船は右手に本土、左手に四国を遥かに想像しながら、さらに関門海峡を通過し、玄界灘を乗り越えて大連の港に着いた。大連に上陸して、早速大連公園を見に行つた。帰つて来たらすぐに全員集合で、そのとき襟の毛の長い外套を支給された。その日のうちに乗車し、満鉄でハイラルへと列車は走つた。ハルピンを通過し、興安嶺を越して目的地であるハイラルの街に着いた。時は昭和十四年三月七日午前十時頃と記憶している。駅から歩いて我々の部隊（満州国ハイラル第八国境守備隊第四地区砲兵隊）に入隊した。

外は一面の銀世界であつた。寒いときは零下三十度、四十度とも聞かされた。よくもこんなに寒いところに来たものだと思つた。二年兵は我々を温かく迎えてくれた。

間もなく三月十日、陸軍記念日である。御馳走が出

た。赤飯でリングゴもついていた。

「いつまでもお前たちはお客様ではないぞ」ということで、いよいよ軍隊生活が始まった。聞きしにまさる厳しいものであった。

教官は榎本少尉（当時）愛知県西尾市出身

中畑少尉（当時）後に戦死と聞く

不動の姿勢、敬礼、徒歩、かけ足、いわゆる基本訓練が毎日続いた。作戦要務令に次のようなことがあったことを思い出した。

「訓練精到にして必勝の信念堅く、軍規至厳にして攻撃精神充溢せる軍隊はよく物質的威力を凌駕して戦捷を全うし得るものとす」

朝は点呼前に銃剣術、射撃練習、夜は襟布の検査から靴の手入れ、銃剣の検査等々。夜、昼、ともに息づく暇もなく鍛えられた。一期の検閲も無事に終わった。（昭一四・六頃）軍隊生活の要領もだんだんわかってきたが、次は各専門分野に分かれての訓練が待っていた。

昭和十四年五月にノモンハン事変が起きた。ソ満国

境の紛争事件であった。我が軍は師団司令部直轄の野戦部隊が主力であったと思う。野砲では伊勢部隊が出動したと思っている。もちろん国境守備からも、ある程度の兵力が駆り出された。（ハイラルの国境守備隊は第八国境守備隊であり、第四地区には連隊本部と歩兵が一中隊から三中隊までの三個中隊とそれに砲兵隊があった。砲兵隊の中には野砲、高射砲、照空隊がそれぞれ編成されていた。）

初年兵のことであるので、記憶は極めてあいまいであるが、確か歩兵、砲兵隊を含めて迫撃砲隊を編成して出動したように思っている。我々の同年兵も出動して戦死した者もいた。暑いときでそれは苦勞したようであった。勝ち戦ならそれほどでもなかったと思うが、メチャメチャに打ちのめされて夜中に逃げた者もいたとか聞いている。あの当時は兵力を満州各地からハイラルに集結した。毎日のように兵隊がハイラルからノモンハンに前進していくのが陣地から見えた。あの兵力がノモンハンに到着しないうちに終戦になった。

（昭一四・九月終戦）飛行機も東満からたくさん来た。

飛行場は砂漠地帯のため、飛行機がおりて飛び立てば自然に飛行場ができた。

当時ハイラルはスパイの街といわれた。それもその通りであると思った。白系ロシア人、蒙古人、満人、種々雑多の人数が住んでいたの、情報は恐らく筒抜けであったと思う。夜は真暗やみの中で流星のような照明弾が上がリ、犬の遠吠えがあり、陣地の歩哨に立っているときなど、薄気味が悪かった。

あの戦争では、野砲隊は馬部隊であったので、水がなくて散々な目にあつたようである。その後間もなく馬を廃止して機械化部隊になった。当時前線の食糧は暑さのため大変なことであつた。我々の部隊では毎日炊事場で、餅に砂糖を入れてついたものを前線に送り届けた。

自昭一四・五月至昭一四・九月、短い期間であつたが約二万人ぐらゐの兵隊が戦死したように記憶している。

ノモンハンに戦友を送り出した後は陣地配備についた。我々は九〇野砲であつたが、高射砲の訓練を受け

て、高射砲の砲手を受け持ったりした。夜間は陣地の歩哨に立ち、昼は十センチの対空双眼鏡を使って監視をした。あるときは兵舎に帰らず陣地の地下兵舎に寝て、陣地守備に専念した。

ノモンハン事変も終局に近づいた頃だつたと思うが、我々が陣地守備についていたとき、夕方突然飛行機が一機陣地上空に飛来した。旋回して様子をつかがっているかのように見えた。「敵機襲来」と当時の指揮官安食准尉（野砲出身で高射砲のことは知らない。山形県出身）は判断し、あわてふためいてすぐに配備を命じ、高射砲の発射を命じた。（高度千メートル以下と思つたが）命中はおるか、飛行機は悠々として旋回飛行をしていた。（二―三発撃つたと思うが）その後東空に消えたが、後で連絡したところ友軍の飛行機であつた。こんなこともあつた。（ノモンハンはハイラルから約二百キロ離れた所）

ノモンハン事変が終わつて、国境の街ハイラルも砂漠の中でもとの静けさを取り戻した。街のネオンも輝き始めた。休日には街に兵隊があふれた。

第八国境守備隊砲兵隊も、もとの平常訓練に戻った。訓練はもともと厳しいものであったが、一面規則正しい生活であって、いつの間にか慣れてしまっていた。時は流れて我々初年兵も二年兵となった。温かい気持ちと、その中にも厳しさを忘れず、初年兵教育に全力を傾注した。

昭和十六年六月頃と思ったが、関東軍特別大演習ということで、膨大な兵力を満州国に集中したことがあった。(少連への牽制作戦)我々の兵舎も全部寝台を二階にして召集兵の受け入れをした。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発、真珠湾攻撃となった。囂々たる武勲が毎日軍艦マーチとともに報道された。

昭和十七年十一月に四十日の休暇をとって郷里に帰った。このときが一番楽しかった。我が家の両親にも兄弟にも会えて実にうれしかった。母親が黙ってこの手に乗せてくれた十円札のぬくもりは、今もって忘れることはできない。

昭和十九年三月頃から部隊の再編成がしばしば行わ

れた。転出者の数も多くなった。昭和十九年四月、部隊名を失念したが、第八国境守備隊の野砲が全部一か所に集合し、野砲連隊を編成した。ハイラルの第三地区の赤煉瓦の兵舎であった。

この頃から、各陣地の弾薬庫に格納してあった弾薬を搬出して南方に送り始めた。飛行機もいつの間にか飛行場から少しずつ姿を消していった。木製の飛行機が飛行場に擬装して置かれるようになった。

昭和十九年十一月、独立野砲第十四大隊(四九〇部隊)が国境守備第五地区の兵舎に編成された。これが私たちの最後の部隊であった。私はその大隊の指揮班に配属された。班長は久保田中尉(九州出身)、部隊長は宮内省少佐、後に境熊太郎少佐と変わった。

我々には南方の戦線の状況は一向にわからなかったが、日増しに苦しくなっていたようであった。第八国境守備隊も興安嶺に陣地を構築するとか、もう既に陣地はできつつあるとか、種々なことが言われていたが、我々の十四大隊は昭和二十年八月二日、満州国の中央部、奉天の南の昌図に移動することになった。兵器、

弾薬ともに貨車に積載し、我々も移動を開始した。国境もさることながら、兵力を満州の中央部に集結し、米軍の本土決戦上陸に備えたと聞いている。中支、南支方面の軍隊も盛んに本土決戦のために移動が開始されていたようであった。

昌図の兵舎はバラック建ての関特演当時の極めてお粗末なものであった。移動後間もなく週番副官の勤務についた。勤務中、夜間二、三人で兵舎の裏畑に西瓜をかつぱらいに行った。その晩西瓜を腹いっぱい食べた。その翌日から下痢し、赤痢にかかってしまった。

最初は自分の個室に寝ていたが、ますます下痢が激しくなり、ついに医務室に入室した。

当時のことであるので、部隊の医務室には薬が全然なかった。わかもとの胃腸薬ぐらいのもので、終いには消し炭の粉を飲まされた。ただしリンゲルだけはたくさんあったので、毎日木ももに大きな針で注射された。あのときは全く骨と皮だけとなって、歩くことも寝返りをすることもできなかった。軍医ももうだめであると戦友に話したということを後になって聞かされ

た。私が今日まで命があることも、リンゲルと、あのとき肉親にもまざる看病をしてくれた、今は亡き夏目氏（愛知県出身）のお蔭である。

生か死かの界をさまよっているとき、医務室の寝台の上で八月十五日の終戦の報に接した。我々は今後どういうことになるだろうと思った。考えても皆目見当もつかない。とにかく、今自分の一番大切なことは、赤痢の病魔から早く抜け出して健康になることであると、そのみを念じていた。お蔭でその後順調に回復に向かった。

部隊では、満州からの現地入隊者の即日帰郷やら、朝鮮人の軍人が入隊していたがそれらの即日除隊やら武装解除というようないことが行われていた。その間に私もどうにか歩けるように体が回復していた。これですみずみずどのようになろうともみんなともに行動がとれると安心した。

そうこうしている中に、部隊の外では満人が暴動を起すやら、日本の兵隊が外出して満人に殺されるやら、物騒なことが各所で起きてきた。

八月上旬頃と思ったが、日本の軍隊も日本に帰す、ただし経路は一たんソ連領を通過し、ナホトカから帰ることになるだろうと、誰からともなく伝えられてきた。そのための一個大隊、千五百名ぐらいの大隊が編成された。私は病後の体であったため原隊から転出となり、北支から来た飛行隊を主力とした大隊に編入された。今まで同じ釜の飯を食った戦友とこの期におよんで別れることは、忍びない想いで残念でならなかった。いたし方なく別れを告げて、数名とともにしょんぼり部隊を去った。しかし、知らない部隊に行っても同じ日本人同士であり、すぐその空気になれた。

昭和二十年九月十五日、食糧を約三か月分貨物列車に積み込んだ。食糧は貨車に平らに並べ、その上にアンプラを敷いて、我々が寝たり起きたりできるように準備した。燃料の薪は貨車の屋根の上に、大きな炊事用の釜も屋根の上に積んだ。我々も食糧の上に乗り込んだ。いよいよ昌図を後に出発した。貨物列車は走った。この貨物は人を含めてどこに行くのであろうか、あてもないあなたまかせの旅であった。

食事どきともなればそれは大変なことであった。釜や薪を貨車の屋根から降ろし、米を寝ているアンプラの下から取り出し、かまどをつくり、水を運ぶ。副食をつくる。もたもたしていれば列車は出発準備ということになる。慌ただしい食事戦争が一日三回は必ずある。あるときには飯ができないうちに出発しなければならぬこともあった。一食抜きである。「ほしがりません帰るまでは」ということでみんな我慢した。汽車も当時石炭がなく、薪や大豆を燃料にして走った。従って力もなく、あるときは全員下車して汽車の後押しをしたこともあった。

中でも一番困ったことは貨車移動中の便所であった。走行中はやむなく貨車の出入口の扉を開けて外に放尿するしか方法はない。腹でもこわそうものなら、それは一大事である。(想像にお任せする)列車が止まればみんな外に出て、まず用便が先決問題である。列車近くの草むらや木陰で、中には列車の下にもぐり込んで枕木の上にもぐり出す者もいる。まさに自然の姿ではあるけれども、今思うと、余り格好のいいものではない。

かった。

そうした自然現象の最中にもソ連兵がつきまといつて、恐らく彼らは我々の逃亡を恐れていたものと思ふが、用便の最中に銃をつき付けられて、履いていた長靴を巻き上げられたという者も出た。

我々と同じような列車は何本も北へ北へと進んだ。

ある駅では二十日ぐらい止まっていた、いつ動くの可想像もつかないこともあった。その頃から車内ではどうも体がかゆいというを言い出した。犯人はシラミであった。考えてみれば乗車以来約一か月風呂には入らない。洗濯はできない。体は臭くなる。シラミがわくのも当然のことである。かゆくて参った。

ある駅でどうしても洗濯をし、風呂に入らなければだめだということになった。野天にかまどをつくり、ドラム缶を切つて風呂を沸かした。洗濯もした。もう十月も半ばを過ぎて、北満も寒さが襲いかかっていた。それでも久しぶりの風呂で我れ先にと入った。その光景はまさに絵にかいたようなものであった。中天高く月は皓々として輝き、空は澄みきつて星が降るような

夜であった。流れ星が一つ二つ長く尾を引いて消えてゆく。今夜のこの月をふるさとの山の中で父、母は眺めているだろうかとしばし瞑想にふけた。この頃になつて郷愁の念しきり、無性に帰りたくなつた。

終戦と同時に即日帰郷、現地除隊になつた将校も北へ進む列車の窓口で見かけた。あの連中も一たんはわが家に帰つたものの、また引つ張り出されたのかと思つた。ある駅で二十日間以上も止まっていた動こうともしなかつたのも、黒河からソ連領に入るために国境を流れていた黒龍江の凍結を待つていたものであることが後になつてわかつた。橋がないので氷上をそりにいっばい荷物を積んでソ連領内に渡つた。持つてきた食糧も全部運んだ。ソ連領内には我々捕虜集団の運んだ食糧が山と積まれていた。(入ソの日は昭和二十一年十二月一日と記憶している)

今度はソ連の汽車に乗り込んだ。客車であつたが、薄汚くて昼の間でも南京虫が出て首根を食いつかれたりした。ソ連の汽車は走つた。速かつた。しかし、一日中走つても駅は来なかつた。殺風景な砂漠の中の一

本道であった。車窓には時々白樺の林がまばらに見える程度で、他は野原の雑草しか目に映らなかつた。

食事は黒パンとスープに代わつた。初めは我々にはなじめなかつたが、腹が減ってくれば何でも最高の味とするものである。走行中の車中で、地図と磁石を持ってゐる者は全部出せといふことで、持っているものは取り上げられた。恐らく汽車の走っている方向、あるいは地点などをカモフラージュする意図があつたのではないかと思つている。汽車は北へ北へと走つたようであつたが、我々の頭の中にはナホトカからの日本送還への一行程であると誰もが信じていた。

一週間ぐらい、汽車はソ連領内を走り走つた。あの晩、汽車は突然止まつた。真夜中の二時か三時頃であつたらうか、窓を開けて外を見た。

「さては日本海などではないかしら」

誰かが降りて様子を見ながら水をなめてみた。「塩水ではない」ことが確認された。とすると、一体どこに来たのか、寝ていたみんなが起き出してワイワイ騒ぎ出した。見当がつかない。打ち寄せる波の状態から

判断すれば全く海としか思えない。汽車は止まつたまま動こうともしない。白々と夜が明け始めた。まさに海そのものである。対岸にはかすかに陸地が見えてきた。しかし左右は依然として海原で何も見えない。「全員下車」の指示があつた。

わら布団の皮でつくつたりリュックサックにいっぱい詰め込んだ(衣類等々)荷物を背負つて汽車から降りた。みんなの行く方向に続いて歩いた。港である。大きな船が浮かんでいて、先頭はもう船に乗り込んでいるのが見える。貨物船の底の方に入った。明かりもない真暗なじめじめした所に荷物を降ろし、その上に腰を下ろした。みんな俯いてひそひそ話しか聞こえない。船が動いたようだ。どのくらい過ぎたのだろうか、船のエンジンが止まつた。「全員外に出よ」みんな先を急いで明るい方向に出た。棧橋を通過して広場に集合した。ソ連兵が銃を肩にかけて人員の点検が始まつた。何回も行つたり来たりして念入りに人員を確認した。「OK」出発。五、六百メートルも歩いたと思つたが、ついに来るべき所に来た。ナホトカから帰るといふ夢

も希望も消えてしまった。

四方に高い望楼があり、周囲は七、八メートルぐらゐもある板塀で包囲されていた。これが我々の生活する収容所である。門が開いてそれぞれ小隊ごとに入った。各建物に割り当てられて荷物を降ろした。建物は幾棟もあつて、一行千五百名がここに落ち着いた。

建物はバラック建てで、窓ガラスは破れているし中は不潔であつた。人の住んでいた形跡はない。(時は昭和二十年十二月八日とされている)家の中も外も全く寒い。零下何十度である。このままでは今晚ここに眠れない。早速各小隊より使役が出て、暖房の薪とりに行った。民家の不用なものがあつて、それを壊して運んだ。ペチカは燃えたがなかなか暖かくならなかつた。

後でわかつたが、この収容所はソ連の海軍が演習に來るときの兵舎であると聞いた。また、あの大きな湖はバイカル湖であることも知らされた。いよいよ収容所生活が始まつた。食事は一変して朝、昼、晩ともに高粱、大豆、粟の、全く人間が主食として食べるもの

ではなかつた。副食も最初の中は満州から運んだ乾燥野菜があつたが、間もなくなくなつた。米、麦と名のつくものは全く食べたことがなかつた。

十日ぐらい過ぎた頃からだつたらうか。「働かざるものは食うべからず」の原則に基づいて労働開始となつた。仕事の内容は雑役が多く割り当てられた。船のさび取りとか各事業所の清掃とか、中でも変わった仕事といへば船の陸上げである。バイカル湖が凍るので陸に船を上げるのであるが、船体にワイヤをかけて万力で船を滑らして引きずり上げる作業である。船の滑りをよくするために材木を湖岸に敷いて、その上に油をつける。

「セイノセイノ」と我々が大声たかつて万力を廻す。なかなか船は上がつてこない。ソ連兵が「ダワイダワイ」と連発して我々の背後からけしかける。それぞれみんな力を出しているのであるが、船は重い。そのうちにワイヤが切れる、小休止となる。我々にとっては大歓迎ということになる。

バイカル湖が凍つてそうした仕事ができなくなつて

からは、材木にロープをつけて、氷の上を滑らしての材木運搬の仕事をしたり、製材所の製品の運搬作業などもした。

二、三か月間、そんな雑役的な仕事が続いたが、寒さと食糧事情の変化によって、病気が続発してきた。特に多かったのが栄養失調であった。体がふくらんで、顔色は悪くなるし、毎日のように死亡する者が出て、

比較的健康な者でも心配の度合が増してきた。十二月から翌年の五月頃までにこの収容所の約一割の人員が死亡した。死体はソ連人の墓地の一角に埋葬された。

バイカル湖が凍り始めたのが確か一月の初旬で、解け終わったのが四月末頃であると記憶している。零下三十度、四十度という寒さでありながら、どうして湖が凍らないのかと不思議でならなかったが、やはり海と同じように大きな波が打ち寄せられ、絶えず水が大きく動いている影響ではないかと思う。

昭和二十一年五月も末頃と思ったが、バイカルの収容所から三十名ぐらい引き抜かれて、伐採のため山の中に入った。私もその一人であった。

バイカルから余り遠くはなかったが、山の中ということで若干心配であった。連れて行かれた所は人里から離れていたが、少し下れば畑はあった。仰げば山は大きく広大なカラ松の自然林である。

ここがお前たちの寝るところであると案内されたのは、山の中の馬小屋という感じの建物であった。中は土間であった。早速丸太を敷いて寝ることができるよう準備した。これから約二か月間の山男（きこり）の生活が始まるのである。

現場には、もう既に伐採されたカラ松の丸太が相当積んであった。仕事は一個班五、六名に分かれての松の伐採であった。ノルマが与えられた。当時の我々にとってはおなかなかきついものであった。働こうという意欲よりも、いかにして「サボル」かということしか考えていない。我々の置かれている存在、捕虜という集団である以上、ノルマなど達成されるわけもなかった。

各班ともに一斉に目をつけたのが山積みになされた松の木丸太である。ソ連兵は朝来て人員点検と、その日

の伐採についての指示をするだけで、日中はついていない。伐採した丸太の積載場所が示されて、初日はそれでもある程度の仕事をした。

二日目からは若干の伐採をし、後は既に山積みされていた丸太の位置の移動によってノルマに近づけた。少しでも時間の余裕を見出して自分の空腹を後々算段をしなければ、とても仕事ができるような体力はお互いになかった。したがって、交代でどんなものでも食べられるものがあればと山の中をあるいは畑に近づいて、茸であろうと雑草であろうと、めばしいものは何でもとってきてゆでて食べたものである。

ソ連兵も無頓着で一か月ぐらいは気付かれずに済んだが、ある日突然詳しく調査された。「バレッタ」伐採の進行度合と山積みされた丸太が片方減っていることが我々の指揮官がしぼられた。

また、あるときは山の中のため日常の食糧が来ないことがあった。その日は朝からめし抜きであった。「働かざる者食うべからず」の逆で、「食わざる者働くべからず」ということで朝から山小屋に寝ていたこと

があった。ソ連兵も働けとは言わなかった。

しかし、寝ていても腹が減っては眠れるものではない。寝ていて話が出ることは、専ら「帰る」ことと食べ物の話以外はない。ポタ餅、饅頭等、とにかく疲勞してくると甘いものを要求するものである。心に描いたポタ餅は大きく、またそれは甘いものであった。

昼食どきになってもまだ食糧は来ない。夕食になっても待ちこがれている食糧は来なかった。外はもうすっかり暮れて真暗になった。さすがに話の種はつき、みんな静かになって、さも眠っているかのように見受けられるが、全然眠れるものではない。時々誰かが大声を上げて「まだ来ないのか、一体どうするつもりだ」どうすることもできない。朝方の四時頃になって炊事当番の声が大きく聞こえた。「来たぞ」。静かであった山小屋の中が急に騒がしくなった。三食抜きのまる一昼夜ぶりに食事にありついた。ものを言う間もなく、ペロリと平らげて、「ハー」とみんな大きなため息をついた。

昭和二十一年七月中頃とと思っているが、伐採も交代

になって、我々はウランデという街の近くの収容所に移った。

ここは大きな収容所で、軍隊当時のそのままの編成で、大隊本部があり、各中隊があった。人員は忘れたが、相当日本人の捕虜（旧軍人）がいた。終戦当時の四九〇部隊で、第一中隊長をしていた根本大尉（福島県出身）もこの収容所にいた。この収容所に移った当初は雑役が多く、中でも街の公衆便所の掃除に行ったことは今でも忘れない。その後根本氏の計らいで根本中隊に配属された。

根本中隊の主力は煉瓦工場での仕事であった。この工場は昼夜交代で機械を休めることなく、一定のノルマを与えられて仕事をしていた。主として我々捕虜の仕事は、煉瓦をつくる一工程である山の土掘り作業であった。作業の工程は一貫した流れ作業であり、山の土をトロッコ（馬力）で工場に運び、それをある程度の大きさに碎き、機械を通して粉にし、お湯を注いで機械で練上げる。練ったものをスクリーンで押し出す。押し出されたものは一定の大きさの枠を通るので、よ

うかん状の形で連続して出て来る。それを切って、乾燥室に運ぶための棧の上に乗せて、生の煉瓦は乾燥室へと仕事は流れていた。乾燥室は煉瓦を焼いている煙を廻して乾燥させる仕組みになっていた。乾燥したものを焼いたり、釜の外に出したりする作業は主としてソ連人がやっていた。

冬は山の土が凍ってしまうので、小屋がけをして、中で暖炉を燃して凍るのを防いだ。このようにして、夏、冬を通して約二年間、私の捕虜生活四年の大半をこの煉瓦工場で過ごしたことになる。ソ連の工場、あるいはどこの作業所でも、仕事場には必ずソ連人の現場監督がついていて、その仕事のノルマ達成のために、厳重な監督がされていた。生産性を高めるために、各工場ともに競争させる仕組みになっており、その競争に勝つためには一にかかって監督の手腕力量に大きなポイントがあった。

約二年間の煉瓦工場の思い出は、馬鈴薯がとれる頃の夜間勤務である。山の土掘り作業は一個班五〜六名であったので、みんな力を合わせ、馬力をかけてたく

さん土を掘っておき、交代で馬鈴薯を盗みに行ったものである。盗むについても技巧をこらし、翌日わからないように各所から少しづつ掘って来たものである。とってきたものはすぐに飯ごうでふかして食べたものだが、一人で飯ごう一杯ぐらいは平気で平らげた。あのときの馬鈴薯の味は、今もって忘れることのできない最高のものであった。その後盗まれることがわかってか、畑に番人がついていて、なかなかかっぱらうのに苦労した。

それともう一つは、夏の夜の短いのに驚いた。夜の山の土掘りをしていても、いつまでも暗くならない。少し暗くなったなと思っていると、いつの間にかもう東の空は明るくなってくる。「白夜」とはまさにこのことをいうのであると体験した。

昭和二十二年の暮れであったか、昭和二十三年の春であったか記憶は定かでないが、我々の収容所に革命が起こった。それは、今まで軍隊当時の編成のまま、階級によって収容所の秩序を保ってきたが、ある日突然、大隊長以下将校を分離し、他の収容所に移してし

まった。残ったものは下士官と兵のみとなったわけである。早速各中隊から世話役が出て、後の収容所の運営について協議がされ、選挙によって責任者というか代表者を決めるべきであるとの結論に達したようであった。

選挙で代表者が決まり、各中隊においても責任者がそれぞれ決まった。いわゆる民主的な収容所の運営に切り換えたというものであろうか。今にして思えば、ロシア革命当時のブルジョアの支配階級の壊滅を凶々と同じ手法をたどったのではないかと思っている。その後、ソ連の政治局員の出入りが収容所にしばしばあった。その頃から日本語のソ連共産党史が収容所に持ち込まれ、捕虜の間でも勉強会が始まり、また若い者を対象にして特別教育が他の収容所で行われていた。

「天皇がなんだ」とか、それは資本主義的な残滓であるとか、何々の誤謬であるというような言葉が、華やかに言われるようになった。仕事に出版する前にアジを飛ばしたり、労働歌を歌ったり、帰ってくればつる

し上げが盛んに行われたときでもあった。

そんなことがあると同時に、一方では収容所の整備も少しずつ行われ、食糧事情も一応の基準に沿った支給がされてきた。しかし、相変わらず粟、高粱、大豆が主食であったが、仕事の方も当然八時間制であり、若干落着きを取り戻してきたときでもあった。

そんなとき、誰が言い出したか忘れたが、少しでも心の潤いを持つと、それには俳句でも短歌でもよいから、それぞれつくって発表し合おうではないかということになった。題を決めて持ち寄った中の一つ二つを思い出した。

(ブロードのソ連の乙女がさっそうと私の横を追い越そうとした)

“振り向けば赤き唇息白し”

(冬の砂漠の中の一本道、その夕暮れどきに)

“一条路、橋のせわしく暮れにけり”

(ソ連の馬鈴薯がとれる頃には番小屋を建てて番人がついていた)

“山裾の馬鈴薯守る小屋は解かりけり”

(我々捕虜同志が必死になって生き抜こうとしていた)

“崩れ道、なお生きんとす夏よもぎ”

昭和二十三年の八月か九月頃と思つたが、突然夜中に起こされた。「今から名前を呼ばれた者はすぐに医務室に行つて身体検査を受けよ」と責任者から指示があった。医務室に行つて、恐る恐る身体検査を受けた。別にどうという検査ではなかったが、身体の栄養状態を見た程度であった。翌日、近くの駅に集合して貨物列車に乗り込んだ。汽車には乗ったものの、みんな何が何だかわからない。もちろん、帰れるだろうかということと、別の所にまた仕事に行くのか、ということでも「全く興奮した」。皆それぞれの自分勝手な判断をし想像をしていた。

どうも身体検査を受けたということが大きなひっかかりとなつて、私は帰るための乗車とは思えなかつた。汽車は何日ぐらい走り続けたか忘れてしまつたが、汽車の中では、どこから流れてきたのかわからぬが、どうも「帰る」ということは間違いなささうだといふ、

もつともらしい「デマ」が飛んできた。私の心の中には大きなひっかかりがあったものの、帰りたいという気持ちややはり心のひっかかりを乗り越えてきた。もうこれで捕虜生活ともおさらばである。三年間の思い出を大切にしようと、不安な気持ちの中にも希望的観測が大きく支配していた。

「汽車はついに来るべき所に来た。」まさにナホトカである。「やれやれ」と思った。みんなもそう思った。

汽車から降りて歩いた。ナホトカの捕虜生活、最後の収容所も見えてきた。プラカードが高く低く、いくつか立てられていた。赤い旗が沢山立っていた。胸は「ワクワク」して足取りも軽かった。自然に歩く足並も揃って、みんな元気いっぱいであった。

どうしたことか、その収容所の前を通り過ぎてしまった。一つ山を越した向こうの幕舎の仮の宿に入ってしまった。一体これはどうしたことだろうとみんな心配しだした。ソ連政府は本当に我々を日本に帰すつもりでここまで連れてきたのかどうかという論議が次

第に高まった。中にはあの最後の収容所が満員であるから一時的にこの幕舎で待機しているのであるという説とが交錯して、異様な雰囲気包まれた。

一週間ぐらいこの幕舎でぶらぶらしていたと思っただが、「全員集合」の知らせでいち早く広場に集まった。通訳から次のようなことが伝えられた。「ソ連政府は君たちを日本へ帰すつもりでこのナホトカまで輸送してきたが、日本政府が船を廻して来ないので、やむを得ずまた仕事に行ってもらわなくてはならない」ということであった。

その日の中に汽車に乗って逆戻りをした。乗車しても、しばらくはものを言う者もなかった。憤懣やるかたなく、汽車の床を思いきり蹴り上げる者もいた。

着いた所はコルホーズ（農場）であった。場所は東瀋に興凱湖という大きな湖があったが、その向こう側のソ連領内の農場であった。

仕事は畑の草取りをやったり、農作物の収穫作業が主体であった。小麦の収穫は大型のコンバインで行うし、馬鈴薯の収穫も機械でやっていたが、どうしても

完全にはとれないので機械の後を我々がついて拾い集めたものだ。このときの農場での思い出は、今記憶をたどってみても心に残っていることはないが、ただ広々としてどこまで行っても畑が続いていたように感じている。

その年、昭和二十三年もまた寒い冬がこの農場にも訪れようとしていた。寒くなって農地が凍ったら何をするのか。仕事があるだろうかと思っていた。ある日また移動ということになった。今度はどこに行くのかと思いつながら自動車（貨物）に乗った。農場から余り遠くない街に着いた。街の名は何といったか忘れてしまったが、相当大きな街であった。

ここでは穀物倉庫の食糧の出し入れの仕事であった。大きな倉庫が沢山並んでいた。貨車が入ってくるとみんなでその荷物を降ろす。一番多かったのは小麦粉であった。一俵ずつ担いで、それを倉庫に運ぶ仕事であるが、次から次へと休む暇もなく、短時間に処理しないと次の仕事に差し支えるということで、我々にとってはなかなか重労働であった。また逆に貨車に積み込

む場合もあり、貨車から降ろして野積みにする場合もあった。

こうした仕事の中で、ある日私にとって、自分の生命に関するような重大な事が起きた。それは空になった貨車を移動する作業中の出来事であったが、もうその日は夕方で、薄暗かった。貨車にみんな肩をかけた後から押したりして貨車を移動し始めた。私は貨車の横につき、肩をかけて下を向いて力を出していた。そのとき前を見ていなかったのがいけないかった。野積み小麦粉の山と貨車に挟まれてしまった。体がよじれるようになって、貨車の下に入ってしまった。体がよじれるの下にあった足かけのようなものに背中をかけられて引きずられてしまった。と同時にもうだめだと思った。瞬間的に悲壮な叫び声をあげたそうであった。自分ではその叫び声は知らなかったが後で聞かされた。どうしたことが背中に掛けられたものが外れて、そのまま貨車は通り過ぎた。うつむきになったまま、しばらく私は起きられなかった。みんなが寄ってきて私を起こしてすぐ収容所に連れて行ってくれた。それから

三日ぐらい収容所で休んでいたが、少しのかすり傷程度で、後はどうということもなかった。運がよかったというのか、ついていたというのか、あのときはもう少し引きずられていれば、恐らく命はなかったと思われる。

私はいままでに三回死の危機に遭遇したことがある。一回目は五歳のとき、家の近くの溜池に落ちて大量に水を飲み、意識不明になる直前を通りがかりの人に助けられたこと、二回目は終戦直前の赤痢にかかったとき、三回目は貨車の下に落ちて引きずられたときである。

考えてみれば運の強い男であったともいえる。昭和二十三年の冬から翌二十四年の春までこの穀物倉庫で働き、暖かさとともに農場での仕事ができるようになった頃、また農場に戻った。今度は前の農場とは場所が違っていたが、やる仕事は農場であるので同じようなものであった。春であったので、小麦の蒔付け、馬鈴薯の植付け等で、ほとんどが機械化による作業の手伝いであった。

暑い夏も過ぎて、この農場でもほつぽつ収穫も始まろうとしていたし、農場の片隅にあった我々の収容所である幕舎も冬支度をしなくてはと思っていた九月も末頃である。また夜中に起こされた。

被服の悪いものはないか、散髪をせよ、爪を切れ、荷物を整理せよ、等々の指示があった。今度は帰れると思った。各収容所の情報は我々捕虜にとって得られるものではなかったが、もう二十四年も九月末である。我々が最後かもしれないも思った。その晩は余り眠れなかった。

朝早く起こされて、貨物自動車に乗った。どのくらい走ったか、小さな駅に着いた。そこで汽車に乗り換えて一路ナホトカに向かった。そのときの車窓に映る光景など頭に残るよしもなかった。ナホトカに着いた。二度目のナホトカである。汽車から降りて歩いた。歩くのにみんな速かった。今度は山の向こうには行かなかった。第一収容所にしっかりと足を踏み入れた。第一収容所から順次第三収容所まで通過した。その間、身体検査やら荷物の検査等が厳密に行われた。

もう乗船の日を待つばかりとなった。みんなの顔色もよくなった。話もはずんだ。夢に描いた大きなボタ餅もその甘さも目の前に来た。

ナホトカに三日ぐらいいたと思ったが、昭和二十四年九月三十日、いよいよ乗船の日が来た。ソ連の大きなドタ靴で、服は日本の軍服のよれよれだったと思うが、意気揚々と船に乗り込んだ。もうこれで二度と逆戻りはしないと思ったが、中にはまだまだ信用できないと力説している者もいた。船は静かに港を出た。この海は日本につながっている。もうどこにも行かない。早く本土に上陸しなければならぬと心に念じた。

離れて行くナホトカの港を見ている者はいなかった。一昼夜、船に乗ったと思ったが、明くる十月一日いよいよ待ちに待った本土が見えてきた。みんな甲板に出て歓声を上げた。海岸の松の緑が一段と目にしみた。わら屋根の家も見えている。日の丸の旗を振って歓迎してくれる人も見えてきた。静かな日本海を船は舞鶴港に向かっていった。スピードがだんだん落ちて来た。船は港に入った。桟橋に白衣を着た三、四人の人がい

た。お医者さんと看護婦さんであった。

看護婦の白衣の白さと口紅の赤さが今もって強く印象づけられている。そのときふと思ひ出した。

“ふり向けば赤き唇息白し”

収容所で作った俳句の一句を。心のゆとりを取り戻したというものであろうか。

船を降りて舞鶴の旧海軍の兵舎に入った。張りつめていた気持ちが一度にどっと崩れ落ちた。坐ったまましばらく動こうともしなかった。

三日ばかり舞鶴に滞在し、その間米軍の事情聴取などがあつたり、軍隊入隊以来この日までの経過を書いたものを提出したり、身体検査を受けたりした。

昭和二十四年十月三日、特別臨時列車で舞鶴を出発し、翌十月四日朝早く掛川駅に着いた。朝の三時頃だと思つている。

浜松まで弟が迎えに来てくれ、掛川駅には朝の三時というのに村長の三浦松太郎氏、助役の山田彦四郎氏などが迎えに出てくれた。留守中家族が大変ご厄介になったことや、早朝の出迎えのお礼を申し述べ、

朝早かったので、当時の県の地方事務所、現在の中遠福祉事務所に厄介になり、明るくなってから二俣線郷里、原田村に向かった。

原の谷駅に着くと、村の人達が大勢迎えに出てくれた。私は家を出てから足かけ十一年振りの帰郷であるけれども、戦争に負けて、その後四年間の捕虜生活を経ての今日の帰還である。我が家に帰るときにはこっそりと帰ろうと心の中で決めていただけに、この大勢の迎えを受けたのには全く驚いた。そして少なからずとまどった。

しかし、見れば懐かしい顔ばかりである。「長い間ご苦労様でした」と温かく迎えてくれた。本当にうれしかった。涙がこぼれ落ちた。そのうれしさと今まで苦労を乗り越えてきた喜びとが交錯しながらも、私の心の一面では、今日ここに迎えに来てくれた多くの人々の中には、恐らく戦争で御息や兄弟を犠牲にされた方々がいるであろうし、その人達の感情を察するときに、この場にこうして帰って来たことが果たしてよかったですであろうかということを考えていた。また

もう一つには、軍隊の生活の中で常々考えていた「生きて虜囚の辱めを受けず」という気持ちが入り混じって、惨めにも似た複雑な心境になっていたことは事実であった。

道すがら旧友と語り、先輩と話をしながら、村の氏神様に到着した。もう、そのときには自分の気持ちも晴れてきた。

神前に恭しく帰還の報告をした。

村長さんの歓迎の挨拶があり、村の人達の昔ながらの温かい祝福の言葉を受けて感涙した。

【執筆者の紹介】

黒田仁朗さんは、小笠原郡原田村に生まれ、その地で育った。昭和十四年二月に入隊のために大阪の難波別院に集合した。大連を経て、同年三月七日、満州国ハイラル第八国境守備隊第四地区砲兵隊に入隊した。昭和十七年十一月に四十日の休暇をとって里へ帰った。

昭和十九年三月頃から部隊の編成が始まり、第八国

境守備隊となる。「周りの部隊を結集した。二十年八月二日、奉天の南の昌図に移動した。米軍に備えたが敵は違った。その効なく敗戦となる。」

昭和二十四年九月三十日、ナホトカを出発して、十月三日に舞鶴を出発して郷里へ帰る。

原田村も掛川に合併して掛川市となる。黒田さんも市の収入役の職を勤め、退職した。昭和五十四年一月十四日、全抑協掛川支部ができて、原里の支部役員として現在に至っている。

(静岡県 石川 博)

シベリア強制抑留を省みて

長野県 北野 和人

臨時召集を受け瀬江の新設独立混成土屋旅団に入隊したのは、終戦も間近い昭和二十年七月二十日の事であった。

歩兵當山大隊新保中隊に配属となり、中隊行李班を

命ぜられる。行李班と言っても唯一人、しかも馬も車両も間に合わず、車馬の来るのを待つ、その折旅団司令部電話室勤務を命ぜられて任務に就く。

本隊は数日の訓練を受けた後陣地構築のため程近くの小高い丘の陣地に登る。

それより暫くして八月九日朝、軍司令部より「旅団参謀を呼べ」との電話が入る。参謀を探して来て参謀が電話室に入り受話器を取り、「三言話したかと思う」と「屋内にいる者は全員外に出ろ」と命ずる。

暫くして全員集合の命令に全員練兵場に集合すると「重要な職場以外の者は全員陣地に登れ」と指令が出る。

「北野は司令部へ行け」と言われ司令部に行くと、旅団長閣下の家族が日本に帰るから旅団長当番の吉田と二人で荷物の梱包の手伝いに行けと言われる。

吉田さんは同中隊で瀬江の町で料理店を経営する御主人だった。手伝いの後特別一泊の外泊を許可してくれた。

後で考えると吉田さんに家族と最後の別れの機会を